

結核の脅威

結核は過去の病気ではなく今なお世界で年間約一千万人が発病している感染症です。世界の罹患率は人口十万人あたり年間 142 となっており、世界保健機関（WHO）が 10 未満との目標を掲げていますが、その目標への道のりはまだまだ長いと思われま

す。WHO「Global tuberculosis report 2018」では年間新規推定患者数は約 1000 万人で、その内訳をみるとインド 270 万人、中国 90 万人、インドネシア 80 万人、フィリピン 60 万

人と東南アジアに多いことが特徴です。

日本では人口十万人あたりの年間罹患率は 13.1 となっており年間新規登録患者数は 1 万 7364 人となっています。多くの欧米先進国が低まん延状態（罹患率人口 10 万あたり 10 以下）に達している中で、日本は依然として罹患率 13.1 と高く、結核との闘いは続いています。

日本での蔓延は下記の特徴が考えられています。

1. 集団感染の増加：大阪、東京、愛知などの大都市部で罹患率が高く、職場や病院での集団感染が散見されます。

2. 世代別の特徴

若い世代では結核への関心が薄れて予防意識の低下が懸念されます。一方、発症者の 7 割を占める高齢者では咳の症状が乏しく食欲低下や体重減少を主訴に病院を受診することが多く、診断までに時間がかかることがあります。結核の脅威はいつ感染したかがすぐには分からず、症状が現れるまでに時間がかかりその間に感染源となり周囲の人々に結核菌を撒き散らしていることです。

3. 多剤耐性結核菌の出現

有効な治療薬とされていたイソニアシドとリファンピシンに耐性のある結核菌、さらには超多剤耐性菌も報告されています。

4. 潜在性結核感染症患者の存在

結核菌に感染しているが症状のない状態である「潜在性結核感染症」は将来結核を発病するリスクが高く、治療を要する状態を示します。都内では平成 26 年 1060 人、平成 27 年 920 人、平成 28 年 1020 人と 1000 人前後で推移しています。平成 28 年 11 月に改定された国の「結核に関する特定感染症予防指針」において潜在性結核感染症者に対して確実に治療を行っていくことが将来、結核患者を減らすために重要である。」との方針が示されています。

日本では外国生まれの新規患者数は、約 7% と米国や欧州に比べ低いものの、来年の東京オリンピック開催や 2025 年の大阪万博を迎えるにあたり、これまで以上に日本に来日する外国人の増加が予想されます。来年、東京オリンピックが開催され、人の移動が増える

と罹患率の増加が懸念されます。そのため罹患率の増加やその動向に注視する必要があります。

病院スタッフはもとより利用者ご家族や面会の皆様にも日頃の体調チェックで早期発見を心掛け、適切な手指衛生の遵守が今後必要となります。

参考文献：

潜在性結核感染症マネジメントガイド 平成30年3月 東京都福祉局
政府広報オンライン 古くて新しい感染症「結核」にご注意を！

東京都立東部療育センター 診療部 副診療部長 荒井康裕